

齋

泉鏡花作

—

三重子。

「可愛い三重子、可愛い三重子。」

此の子は、私の今住んで居ります町内の——

少々間がありますが——斜向ひの家で、おぎい、

おぎいと生れました。

煙草專賣局のお勤人の……たしか五女で、

末兒でございました。

三十四五に成つて、まだ兒と言ふものゝない家内

は、小買ものゝ出入、錢湯などで豫て其の母さんと

見知越だつたものでございますから、今度の嬰兒が

出來ると、一層親しく成つて、其のお大事な掌中の

——珠にしては些と大き過ぎますけれども、何、

珠は大きくつても更に差支はありません——珠

を、遠慮なしに拝借して、それこそ珠のやうに、大

事に抱いたり抱へたり、頬邊を嘗めたりしました。

處が、此は・・・密事と言つても可い、私には内證だつたのでございます。・・・實は少々お小兒のある方には、申上兼ねますが、私は、小兒が大嫌だ。――敢て憚る處はない、私は小兒は大嫌・・・

――と言つて、此の話を、圭吉さんと言ふ友だちが私に話した。

よく其を知つて居るので、細君は一寸抱くに、圭吉が外へ出て留守の時を見計らつたさうである。其處で、主人が餘所から歸ると、自分の家の軒下に、戸外とか言ふものを嬰兒に見せながら細君が淋しさに、嬉しさうに、月の末の勘定の、みそかはあるか知らんと言つたやうな、不思議な優しい顔をして立つて居るのを屢々見た。

但し嬰兒に戸外なるものを見せるより、小母ちゃんは、自分が嬰兒の顔にばかり見惚れて居るから、蜻蛉が來ても、蝶が飛んでも、そんな事はお構ひなし。嬰兒の顔に時々頬邊を押付けては伏目に成つて

俯向うつむいて居ゐるので、圭吉けいきちが町内ちやうないの大銀杏おほいてふの下あたりしたを歸かへつて來きても、うつかりして居ゐて、一寸ちよつと氣きがつかない事ことが毎々まい／＼であつた。

「おや、お歸かへんなさい。」

と一寸ちよつとてれて、目めのふちへ上氣じやうきをしながら、すた／＼斜向すぢむかうへ驅出かけたして返かへしに行く。

「暑あつかつたでせう。お着換きかへなさいな。」

「何處どこの……。」

がきだいと言いふ處ところを、亭主ていしゆ少々薄せう／＼うすのろと來きて居ゐるから、いまゝで抱だいて居ゐた細君さいくんに、聊いさ／＼か其その……
・・敬意けいゝを表へうして、

「何處どこの兒こだい？」

「駒井こまゐさんの嬰兒あかちゃんです。」

「何時いつ、生うまれたんだね。」

「先月せんげつよ……甘いお乳ちちの、堪たまらない好いい匂におひがしますよ。一寸私ちよいとわたしの胸むねの處ところを嗅かいで御覽ごらんなさい。

い。」

「いや、暑中しよちゆうにつき、御免ごめんを蒙かづむる。」

と、言いつたばかり。

別に叱言は出ないから、次第に細君は大膽に成つて、例の、圭吉が歸つてくるのを、門に立つて、慥う見ると、

「そら、小父ちゃんが歸つて来たよ。」

と落着いたもので、抱直して、密と嬰兒の顔を向けて、

「一寸、御覽なさいな。」

「うゝ。」

「可愛いでせう。」

「うゝ。」

軒並びの御近所の手前、第一、此の嬰兒の、上の女の兒、其上の男の兒などが、居まはりを飛んだり、勿ねたりして居る處で、否とは言へない。で、諾とあやふやに言ふと、細君は圖に乗つて、

「よく御覽なさいよ、笑ひますからさ。」

「そりや笑ふだらうさ。」

と其のまゝ引退る。……が、一人で茶を注いでも、最う其處に嬰兒を抱いて居る細君を呼ばないやうに成つた。

成程、成程、莞爾する……

此の莞爾が、拵へたり、繪に描けたり出来るやうなものではない。

或時、おなじ門口で、つい釣込まれて、圓い顔を見込んで、蒼が開いたやうに、顔中、耳まで花瓣に見えて莞爾とされてからはふと何うかすると、いや、何うかする處でない。何うにも、其の莞爾が見たく成る。見ようと思へば細君に抱かせて置いて、

「今日は。」

對手は嬰兒だし、他に言ひやうはないから、今日は
――

「結構なお天気ですな。
などと言ふと、莞爾する。」

細君も、莞爾しながら、

「何とかお言ひなさいよ、馬鹿々々しいわ。」

「いや、構はない。――今日は……失

禮。
「

それ、又莞爾する。――何うも悪くない、何とも言へない。

其處で、長雨の降る秋の夜などは、晩飯が済むと、圭吉の方から、催促の目配せに及んで、

「おい、借りて来ないか、……例のを。
例のを、と言ふやうでは、毎度の事と見える。」

「嬰兒ですか。」

「勿論さ、いろ女。」

「最う寐たかも知れません。……それにまだ臺所メ片附けなくちやあ。」

「構ふもんか、寐て居たら起すべし。」

「泣くと困りますもの。」

「可いよ、ひどく泣くやうだつたら、恐縮だが、お母さんお附添と言ふ事に願はうぢやないか。餛飩でも御馳走しようよ。」

「では、一寸。」

と恩には被せたものゝ、内々々悪くはないのだから

ら、障子も格子戸も開放しにして出て行く。と、其の開放を見透しに差覗いて待つ處へ、何、泣く處ではない。細君に高い／＼と言ふ形で抱かれて、・・・最うお腹が好さうで、牛乳の壇なしに、護謨の吸口ばかり、ちゆう／＼と吸ひながら、大な目をぱつちりと三つて来る・・・此の瞳に對すれば、罪も報も忘れられる。懺悔も出来よう。實に嬰兒の目を見る時ばかりは、人間は皆清く美しい星の化身と頷かれる。

「はい、お待兼ね。」

「やあ！ 来たな。」

細君が、手を突かひ棒に、活きた置物のやうに据ゑる顔へ、無遠慮に顔を押しつけて、

「ばあ・・・と、ほう、笑つたー 莞爾々々する。」

「嘘ばつかり、口へ護謨が入つて居て笑へませんとさ。ねえ、坊や。」

「いや、目を御覽、鼻を御覽、む、護謨が笑ふよ、護謨が笑ふよ。は、は、は。」

と嬉しさうに笑ふと、―― 氣を感じたか、ほとりと護謨の吸口を落して、當歳の三重子はいま生れたやうに莞爾した。

圭吉は細君と目を合せた。

思はずほろりとして、

「抱かうか。」

「お抱きなさいな、しつかりと。」

と此も少し聲が曇つて、

「しつかりと抱くんですよ、然うでないといふと嬰兒は

可恐がりますとさ。」

「可し、心得た。―― さあ、来い。」

「大變な騒ぎだわね。」

「黙つておいで。―― 泣くな、可いかい。・

・泣かれると評判が悪くなる。・・・いや

あ、来たぞ。―― これは餘程柔かい。・・・」

「まあ、小父ちゃん、おしつこをされると不可ま

せんよ。」

と其處へ、束髪に結つた、瘦ぎすな、肌襦袢の襟の白い母親が念のため牛乳の壺を御持參で。

「これは入らつしやい、何、構ひません。」

「でもお氣味が悪いでせう、お嫌ひでいらつしや
いますさうですから。」

圭吉は額を撫でて、

「いや、何うも……」

「さても・・・酸漿娘を生捉らうかね　ー
一寸行つて、奪つて来ないか。」

晩飯の際のおあてがひ、一合を手酌で済ますと、
とつちりものに成つて、ごろんと肘枕をするか、出
來がいゝと、通りの雑誌店でも覗きに行かうかと言
ふ圭吉が、極つて、こんな事を毎晩のやうに言
ふ。・・・

いる同士は深く成るほど、仕ぐさが段々いけ粗雑
に、言葉が邪慳に成るとか聞く。・・・
此の生捉つたり、奪つたりは、抱く、舁く、据ゑ
るなどゝ言ふよりも、意味に於ては、どんなに柔だ
か知れないのである。

「コン畜生。」「・・・は、憎い時、癩な時は
かり言ふのぢやない。」

處で、此の三重子だが、はじめは夏のことゆゑ、
白地の中形が何か着て居たつけ。淺黄でも、絞でも、

鹿の子でも、そんな事はお構ひない。嬰兒、嬰兒とばかり呼んで居たものであつたか、節秋に入るに従つて、もみぢより、萩より前に、紅の色を染めて、ひとつみの衣ものが緋無地の唐縮緬とかはつて、被つた帽子も眞赤に成つた。――其處で酸漿娘である。

此の酸漿娘の間が暫く續いた。馴染むにつけ、親むにつけ、何よりも以て可愛いにつけ、呼び名は、いろ／＼にかはる。……みいちゃん、みい坊は當前。みい公と呼んだり、みのじと洒落たり、木菟とはずんで叱られたり、やがて呼馴れて、通り名に成つたのが、また曰く（みんみい。）である。

みんみい。……何うも一番いゝ、第一これが其の嬰兒の顔つきにも、身體の具合にも、様子あひにも、それから時々泣く聲にも、よく當嵌る。やがて、母ちゃん、續いて小母ちゃん、従つて希くは小父ちゃんとも呼んでおくれ。――其の初音にも似るであらうと思つた。……みんみい。考へたが、これに相當した文字が一寸思ひ當らない。か

なで書くと、（みゝ）に間違ひさうだから、少々
氣取つたが、アルファペットで内々試みた事がある

――

・ ・ ・ ・ ・ 餘所の兒であつて見たが可い、こんな
形を並べようものなら、なづけた親よりは、其の兒
の方が撲られよう。

みんみいは、扨て毎晩借りて來て居るうちに、いゝ
機嫌でばかりは居ない。たまには、むづかる事もあ
つたが、それも智慧熱だの、齒の生えかゝる時だの
で、蟲氣もなく、次第に乳のほかに鰯をしゃぶつた
り、澤庵の尻尾を啣へたり。 ・ ・ ・ いや、新造に
成つたら怨まれるだらうが、相違なく澤庵の尻尾を
啣へたり。 ・ ・ ・ 又此を見たり、聞いたりする
ものが、薄汚いとも、外聞が悪いとも何とも言はな
い。 ・ ・ ・ ・ ・

「何、澤庵を舐めてる、偉い。―― やあ、鰯を
しゃぶつてら、偉い！ ・ ・ ・ ・ ・」

輕燒煎餅を噛む音が愛らしかった。

「聞いて御覽なさい。」

「何だい。」

「輕燒を噛る音よ。」

「……恚う口の處で、兎と言ふ身で耳を立て、

熟と聞くと、

「成程。」

カリノ、カリノ、カリノ、カリノ、微に銀鈴を

振るやうな微妙な音がする。

「ね、三太郎（飼鳥の目白鳥の名）と四子

（同上）で、逗子で寂しい晩方、もう寐かせる時、

二羽で顔を附着けて小さな聲で何か言ひ／＼したで

せう。……そつくりですよ。」

と細君も目を細うして打傾く……

以來、外出のかへりには、圭吉の袂に屹と輕燒が

忍んで居た。

續いて玩弄品を買つて歸ることを覺えたのである。

「御免——おもちやを下さいませんか。」

「入らつしやい、どんなのが可うございます。」

おもちや屋の女房の世辭のいゝ事をはじめて知つた。小兒をあつかひつけて居る所爲であらう。・・・其の後、方々を試みたが、どの店も世辭が好い。小僧まで何時も笑顔で居る。こゝを以て考へるに、高利貸と違つて、君子の選ぶべき商賣は、おもちや屋か花屋であらうも知れない。

「どんなのが好いでせうかね。」

と、大人にも持てさうなものばかり目に着いて、一向見當が分らない。・・・

「つい、聞いて來なかつたものだから。」

と、うつかり饒舌つて一寸てれた。極りの悪い思ひをすると、そらさない女房が、何だか嬉しさうに和笑として、

「坊ちやまですか、お嬢ちゃんですか。旦那、お

幾つぐらゐ。」

「女の兒ですよ、まだ嬰兒なんです。」

「まあ、お可愛らしい。」

此も、うつかり言つた、が、善意に解釋をしないまでも、決して空世辭でない事は、おのづから客の

心こころに感かん應おうする・・・圭けい吉きちは、胸むねに嬰あかんぼ兒ごの形かたちのな
いのが、あぢ氣きないやうであつた。

四

爾時は、おもちや屋の女房に見立て、貰つて、セ
ルロイド製のがら／＼を買つて歸つたが、

「おい、来た、みんない。」

と、がら／＼と振ると、莞爾々と成つて、いつ
覺えたか小さな手を出す。――小母ちゃんの喜び
やうが又何うして、主人が半襟を一掛買つて歸つた
やうなものではないト・・・ 譬に引いては見
たものゝ、参考のため小母ちゃんに訊いて見ると、
半襟どころか爪楊枝一袋土産に買つて来た例はない
のだと言ふ。

眞個ださうである。が、そんな事は何うでもいゝ、
とに角、それ以上に喜んだに相違ない。

「まあ、みんない、いゝ事ね。」

其處で、此方も圖に乗つて、がら／＼の玉の、は
じめの二つが三つに成り、五つに成り、七つ十ウで。
獨笑して袂に忍ばせ、出先から歸る我が町内の、も
う横町あたりから、袖をがさ／＼と出しがまへをし

て、居るか知らんと、恚う其の角の乾物屋。・・・
・些と語呂はつき過ぎるけれど、實際角に乾物屋
がある。其の角から、密と見込むと、果して大銀杏
の樹が空を蔽うて、町内も其處ばかりは影も深山め
く下に、母さんか、小母ちゃんに抱かれて、何の鳥
やら、梢から落した天人の卵と言つた形に抱かれて
居る。

ト最う此方は、がら／＼を耳から次第に、頭の上
へ振上げて、をかした三番を踏んで寄ると、目敏く
見つけて、

「あゝあゝ。」と言ふ。――最う近頃では何
か言ふ。と、言つて、恚う嬉しがつて、勇んで、抱
いたものゝ胸から乗出さうと、揺上る袖が鳥の羽の
羽撃くやうで、其の紅の羽の下から射えた風情の、
小さな手を、ふつと伸ばす。

軽い。・・・ふはりと浮いて居るやうに見え
る。

で、其のがら／＼を、取るにしろ、振るにしろ、

手を突出したり、拳をたゞ動かしたりするのではない。ひよいと、おもちやを取りに来る間に、ひとりでに細い指がしな／＼と動いて、動きながら慥う出て取りに来る。取ると、小指も紅さしも皆しなつて、柔かに、しな／＼と振るから、しなひがおのづから、玉に傳はつて、コロン、コロン、コロンとしを、らしく優しく響く。・・・何うして／＼、盲目の師匠に三年習つた、餘計な（お）の字のつく琴のやうなものではない。

時に一説がある。或女形の俳優に聞いたが、手に白粉を塗るにしても、節くれ立つた太い指を、華奢に白魚のやうに観客の目に映さうとするのは、一寸火箸へ手を掛けるにも、袖口から火箸へ行るまでに、手首と一所に五本の指をちら／＼と揺つて、撓はしながら持つて行く。・・・成程、しをらしく、優しく見えよう。嬰兒はおのづから其の技を、天から授つて居るのである。

單手ぶりばかりではない。やがて漸く這ひ／＼が出来ると成る、這ふ時の裾捌きの鮮麗さを見て下さ

い。・。・。・。借家の疊は汚くても座敷を縦に横に、
すら／＼すら／＼と美しく雌波を打たせる緋の裾へ、
鬱金の施の水際を立て、ボンと小褸を匆ねて、す
ら／＼と洲濱に裳を運んで行く。・。・。・。足首は
愚か踵も見せぬ。其の綺麗さは、渚の千鳥、柳の燕
を思はせる。家業で裾を曳く藝妓でも、みつちり踊
の嗜がないと、いま時そんな裾捌きの出来るのはな
いさうである。

此はしかし、可愛いみんなばかりではない。嬰
児は何處の果の裏長屋、山家の奥のも同じである。

膳の向うへ、トンと足を投出させて、片手で小母
ちやんが背中を壓へると、蝶脚のふちへ丁と大な目
だけが見えて、鼻も口もかくれて居る。

「唯今、お肴。」

と、晩酌のおあてがひに澤山もない、鮎並か、鱧
のいゝ處を蚝つて、一度口へ入れて、小骨のありな
しを試すのだが、うまい處を吸ふまいとするから、
奥歯をよけて、前歯で探つて、舌のさきで小さく絡

めて、軽く箸で取つて、もう一度おしたぢをつけて、
「あい、お魚。」

何と、割目で軍鶏鍋を突かしたら、箸の尖が千本
に變化する寶藏院の達人が、こゝでは入身の小太刀
と變る。・・・・

處で、みんないは、目で待つて居て、少し伸上る
やうにして、仰向いて、・・・・仰向き状に一寸
横に傾いてうける。――後に、自由に立歩きの
出来るやうに成つてから、宜しく御機嫌のほどを見
計らつて。

「みんない、お頬。」
と頬邊を押付けておくれと言ふと、縁側などで遊
んで居るのがちよろ／＼と驅けて來て、もう、疊一
疊ぐらゐさきから、柔な肩ぐるみ、胸を撓へて、ト
足を浮して、すつと來て、斜に抱きつくやうな姿で。

熟と眞綿のやうな圓い頬邊を、小父ちゃんの髭に
押附けるのが矢張り――膳の向うで口を開ける

のとおなじ科かで―― 恚いかう仰あを向むくやうにして、仰あを
向むき状さまに莞爾にっこりと顔かほを傾かたむける。

と思おもふと……

「雀すずちゃん。すうちちゃん。」

と、勿論もちろんもう口くちが利きける―― すぐに縁えんの方ほうへ
飛とんで行ゆく。

「みんない、お頬つぺ。」

「うむ……」

これは御機嫌上ごきげんじやうの部ぶで。

「みんない、お頬つぺ。」

黙だまつて合点がってん々々／＼をする。それは御機嫌中ごきげんちゆうの部ぶで。

そんな時ときは頷うなづくばかり、もの指さしなんぞ振廻ふりまはして、小
母あちゃんの繕つくろものゝ邪魔じやまをして居ゐてなか／＼何どうし
て持もつて来こない。

「みんない、お頬つぺ。」

「あかべる、チヨン／＼。」

と顎あごを出だし、トン／＼と足踏あしぶみをする。悪い事わるいことを誰だれ

かゞ教へた。ーが、まだじらすうちは好い方で、面倒臭いと、黙つてスツと来てコツンと出額を打つけて、

「こいつ！」

と言ふ間に、ばた／＼驅出す。でも、肩を入れて、胸を張つて足を浮して、ふはりと来る、嬌態の科にかはりはなかつた。

圭吉は、嘗て逗子だつたか、鎌倉だつたか、浪打際で、双方から来て、ふいと出合つた西洋人の男女があつて、女の方がツツと寄つて接吻をしたのが、丁度、みんみいのお頬に似て居た。

接吻も恚うなれば、藝事で、酒屋の小僧も水はかけない。

至極御機嫌が宜しいと、お頬のあとが膝乗りの一藝と成つて、小父ちゃんの胸へ、うしろ向きに背中を持たせてボンと乗る。……

「すゞ蟲ア」

「チンチロリン」

「松蟲ア」

「リン／＼リン」

「すゞ蟲ア」

「テンチロリン」

と、おほわたが飛ぶやうな、微な白い指の尖で、
鐵瓶の蓋のつまみを拍子で廻すと、くる／＼と廻つ
てチンチロリン。

「松蟲ア」

「リン／＼リン」

と、今度はつまみを撥ねるやうに、上からたゞく、
リン／＼リンと鳴る。みんない浮かれて唄ひ出す。

（ねんねんよう、小兎よ、

何うしてお耳がお長いの、

母ちゃんの腹に居た時に。）

兎のお腹へ、とろけ込んで、唄が、あの長い耳を、
玉の蓄音器にして、そこから唄ふやうに聞えるので

ある。

（椎^{しひ}の實^み、榧^{かや}の實^みたんと食^たべて、

そうれでお耳^{みみ}がお長^{なが}いのー

何^{なん}となく涙^{なみだ}ぐまるゝ。よく透^{とほ}る、聲^{こゑ}のいゝ兒^こであ

つた。

「兎うさぎさんはね、みんない、母かあちゃんの腹はらに居ゐた時ときに、．．．可いいかい、椎しひの實み、榧かやの實み澤山たん食たべて、それでお耳みみがお長ながいんだね、ー お耳みみが長ながいんだよ。可いいかい。．．．みんないはね、蚕豆そらまめ、堅豆かたまめどつさり食たべるから、それでお鼻はなが低ひくいんだぜ、分わかつたかい。」

「うむ。」と言いつて、澄すまして居ゐる。．．．妙齡としごろに成なつて恚かう言いはれたら、忽たちまち生命いのちにもかゝはるだらうのに。．．．

「お低鼻びしやは、どれだい。」

「こゝ」と、其その鼻はなへ小ちひさな指ゆびの尖さきを一ちよつと寸そ反そらす。

が、何なんとも言いへない。涙なみだがでる。何どうもいゝ。ー 第一だいいち其その鼻はなの低ひくい、少々せう／＼額おでこの所ところが可か愛あいい。最もう恚かう成なつて、同おなじ背せ恰かつかう好かうで、ツンと鼻筋はなすぢの通とほつた他所よその兒こを見みると、いけ高慢かうまんで癩せくに障さる。

いや、しかし、此の堅豆には毎々弱らされたもので、――最う一人立ちが出来るやうに成つて、戸外へ出るので、緋羅紗の靴もあてがつてある癖に、姉さんのかつこだの、兄哥の薩摩下駄だの、極つて大きいのを穿きたがるから、櫓を引摺るやうで、出来る一人歩行が出来ない。處で、お父さんに手を曳かれて、宙にぶら下るやうに出掛けて来る。さて、それが早朝で。……お父さんは勉強家で、お役所へ勤が早い。其の早いのに連れられて、圭吉の門口まで来ると、お父さんは安心をして、手放して出勤する。

もう占めたと、どんな隙間からでも、ちよろ／＼と入つて来て、

「小父ちゃん、起き、小父ちゃん、起き。」と
枕頭へちよんと坐る。

此方は癖の、宵張で寝坊だから、二度や三度ではなか／＼以て目を覺さない。

「小父ちゃん、起きしなさい。」と内でも誰か

言はれるさうで、聞覚えの叱言を口移しで、鼻をつまむ、額を撫でる、頭髪を引張る。……まだ起きないと、ちよこ／＼と目を突つく。

「来たな、むにや／＼。」
と言ふと、すぐに掌へ、蠶豆の堅豆を一ツ押つける。

「剥いて。」
「むくのか。」
と眠い目を擦り／＼、小口から尋常に剥きはじめて、ぱらりと皮が取れたと思ふと、柔い手でちよるりと、引攪つて、ボンと口へ放込む。いや早いこと！……入れて噛むかと思ふと。

「剥いて。」がさ／＼と鳴して、白い油屋さん
の前衣兜から一顆出す、又剥くと、すぐ、
「剥いて。」爪を取りたての時なぞは、はアノ
呼吸を掛けるまで、指の尖が疼く成る、煙草も喫
めない。

「まだかい、みんない。」

「剥いて。」

「畏つたよ、何うも、此奴は一仕事だ。」

と。口叱言を言ひながら、兩親もあり、姉もあるのに、

此の不器用なのを思ひついた心意氣と言ふものが尋常ではないと、嬉しがつて、手の疼いなんぞ擦た
い。

そのうちに、黙つて一顆、其の蠶豆より小さな指
が小父ちゃんの口へ、堅い奴を捻込むと、自分もた
んのうして、ごろんと横に轉がつて、小母ちゃんと
兩方の衾の透いた中へ仰向けにストンと入つて、ハ
ンモツクのやうに身體を揺ぶる。

寢坊に掛けては小父ちゃんを凌ぐ小母ちゃんが細
い目をして、

「何處へ入るのよ。」

「溝」

「可厭だよ、溝へなんか入つては。」

とすつと抱へて引込むと、くツくと笑つて、目も鼻も一所に出ない乳へ押着けて、手足を刎ねる。 . . .

嬰兒は刎ねる . . . 此方も大分調子に乗つて話は飛んだー 考へるとお膳の向うへ、つゝかひ棒で、漸と据ゑられて、「さあ、お肴。」で小さな口を開く處から、お頬に成つて、チンチロリン。小兎を歌つたのでは、西洋の話ではなければ白い鳥が啣へて來た雛でないと然うは行かない。間に言ひたい事は、もつとく澤山あるが、小鳥のついでに一寸話さう . . .

頸の窪をすりたての、柔い頭髪を撫でながら、

「みんなは誰の子？」

「小母ちゃんの。」

「然う、何処で生れたの。」

「銀杏の樹で。」

此の兒の家の眞向うに、例の大銀杏がある處から . . . 親たちは基督教信者だが、白い鴿の鳥

の諺を、うまく換骨脱胎して、いゝ事を教へた。

「銀杏の樹へ誰が持つて來たの。」

「木兔。」

「可厭だね、木菟」

と小母ちゃんは言ふけれど、成程、銀杏の樹では、折鶴の鶴も可笑い。――鴉か、鳶か、梟か、棕鳥處で。……雀は居る、が小さ過ぎる。其處で親たちは木兔にしたのであらう。

「結構です。」

木兔結構……。木兔の兒でなうて、此のくらゐよく分る、耳の立つた、晝も明かな大きな目があったら、お目には懸るまい。

第一、木兔を可厭だと言ふ、小母ちゃんが何うだらう。

頭へ密と手をのせて、

「みんな、此は。」と訊くと、

「河童顛……」と妙に、此の時に限つて、
少ししやがれ聲をして言ふのは——誰が教へた。

小母ちゃんだらう。……何？ 然うでない。
小父ちゃんだったか、其は恐縮、然うか／＼。

其の癖、小母ちゃんの話したのでは、一度下町へ
買ものに抱いて行つて、電車の中で、みんなが、煩
がつて、眞赤な帽子をむしゃ／＼つて取つた時、其
の中ぞりを壓へて、

「みんな／＼これは？」

「河童顛。」

「まあ、何ですえ。」

と隣席に居た餘所の娘さんが聞いたので、

「もう一度——みんな／＼これは？」

「河童顛。」

「まあ、河童の顛なものですか、」

「うゝむ、河童顛。」

電車の中は哄と笑つた——と言ふではないか。
小母ちゃんだらう、そんな事を言はせたのは。しか

し、其それを聞きいた時とき、圭吉けいきちは嬉うれしかつた。其その娘むすめさん
をはじめ、笑わらつてくれた人ひとたちの許とこへ、煎餅せんぺいの袋ふくろで
も持もつて禮れいに廻まはりたいやうであつた。

六

しかし待てよ・・・煎餅の折どころか、番茶の御馳走もしないで居て、讀まるゝ方たちに、こんな事を聞かせて可いのか。

こゝに一説がある。――といつても圭吉は言ふのである。

凡そ世の中に、我が兒の事を饒舌る奴を聞くほど、退屈なものはない。日月は見て明いと同じ事で、誰も兒の可愛くないものはないから、饒舌るには無理はない。癩にも障らなければ、氣障でもない。愚劣だとも思はなければ、馬鹿だとも思はない。が、唯退屈する。

これを聴くくらゐなら、詰らない説教の方が、滑

稽でまだしも増だ。藝者、遊女の素惚氣などは結構である。自惚でさへ、場違ひでも鼻をつまめば我慢が出来来る。眞の惚氣に至つては、人生の一大事、慎んで承るべきものである。たゞ、兒の惚氣は退屈だ。容色を讃めれば、欠伸が出る。智慧をほめれば、其の上に涙が出る。況や將來の希望をのべて、此の子が大きく成りましたら、と、何千年にも一寸はない、桃太郎と衣通姫に成りさうな事を言ふのを聞かされると、涙の上にむしづが走る。激しきに至ると撲りたく成る……

方々は、退屈と言ふものゝ苦痛を御存じであらうか。

たとへに引くも烏辯がましいが、佛國の名作家、メリメエの「えとるりあの花瓶」と題する作品の一節に、リシヤアルと言ふ士官が、フォステイと言ふ處で、盜賊に殺される話がある。それはナポリへ旅行の途中で、道中が物騒なるため、多人數連立つて行く筈の處を、マシニイと言ふ、天下、マシニイ程退屈な男はないと言ふ男が、一行に加はることになつたゝめ、其のリシヤアルが退屈を恐るゝ餘り、

單で仲間を抜けて、間道を通つたゝめである。――語をかへて言へば、マシニイは殺人犯の仲間である。……しかしリシャルは、同じ殺さるゝのに、容易い一方を選んだ。……と言ふのである。退屈は人を殺す――殺さるゝものは、自家防禦として、或は對手を殺さなければ成らない。

現に、圭吉の知つた、新婚の優しい若い夫人が、あまり毎夜、姑のために花がるたの相手をさせらるゝために……。いぢめられも、憎まれもしないのに、極度の神経衰弱を起して、氣が狂ひさうに成つたのがある。我儘ではない。退屈だつたのである。其の姑と言ふのが、又お人よしで、まけても勝つても、聊の感激なく唯すきであつたから、相手は退屈したのである。

しかし……。こゝに、もの語るのは、我が兒ではない、餘所の兒である。よその兒の可愛さを語るのは、我兒と言ふものゝ影も持たないさみしいものゝ慰めである、許さるべき惚氣である。特權である。此の特權のあるために、聞いて退屈らしい人々

に對して、我兒のないのを、感謝する。．．．．．
と言つて、言せまつて、はら／＼と落涙した。

兒のない私も泣いた。

圭吉は、つい又思ひ出したのであらう。

【完】